

## ヨハネの手紙第一2章15-17節 「神の愛を妨げる世」

### 1A 御父の愛

1B 御子をくださった愛

2B 犠牲といのち

3B 神の子ども

### 2A 世の思い煩い

1B 実を結ばせない茨

2B 冷えた愛

3B 行いによる否定

### 3A 悪い者の支配

1B 神から人を引き離れた蛇

2B 妬みと殺人

3B 自分の名をあげる高ぶり

### 4A 世への愛

1B 神の造られた世

2B 神に敵対する世

### 5A 世にあるもの

1B 肉の欲

2B 目の欲

3B 暮らし向きの自慢

### 6A 過ぎ去る世

1B 一時的な楽しみ

2B 後悔と嘆き

3B 永らえる喜び

## 本文

ヨハネ第一の手紙、2章を開いてください。今朝は、前回の学びの続きをしたいと思います。2章15-17節です。「<sup>15</sup>あなたがたは世も世にあるものも、愛してはいけません。もしだれかが世を愛しているなら、その人のうちに御父の愛はありません。<sup>16</sup>すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。<sup>17</sup>世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。」

前回の学びで、ヨハネが14節で、若者に対して、「悪い者に打ち勝ったからです。」と励ましていたところを読みました。その悪い者が支配しているのが、ここで「世」とヨハネが呼んでいるもので

す。この世を愛してはいけない、それは過ぎ去るものなのだ。あなたがたは強くなければいけない、と励ましているのです。

けれども、同じヨハネは、福音書で、「神が世を愛した」と、イエスが言われたことを書き記していますね。「ヨハ 3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」世を愛されたと言われているのに、ここでは世を愛してはいけないと教えています。これはいったいどういうことか、まずご説明したいと思います。

## 1A 御父の愛

### 1B 御子をくださった愛

今、読んだところ 15 節で、「もしだれかが世を愛しているなら、その人のうちに御父の愛はありません。」と言っていました。御父の愛とあります。それが、今、読んだヨハネの福音書 3 章 16 節です。御父なる神は、御子をお与えになったほどに私たちを愛されました。

### 2B 犠牲といのち

神は、ご自分の独り子を、私たちの罪の供え物とするほど、私たちが罪によって滅びないようにしてくださいました。そして、この方をよみがえらせたことによって、私たちに永遠のいのちを与えるようにしてくださいました。「Iヨハ 4:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」

### 3B 神の子ども

そして私たちを、御霊によって新しく生まれさせてくださったのです。神によって生まれ、ご自分の子どもにしてくださいました。これほどまでに愛されています。

## 2A 世の思い煩い

そして私たちの神は、その愛の中で生き、養われ、育ててほしいと願われています。パウロが祈りました、「エペ 3:17-19a 信仰によって、あなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように。そして、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、すべての聖徒たちとともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができますように。」

### 1B 実を結ばせない茨

ところが、これほど愛されているのに、その関係に対して興味が薄れて、いつの間にか心が離れていく、ということがあります。その原因が「世の思い煩い」です。イエスが、種蒔きの喩えで、茨の中に落ちた種について、こう説明されました。「マル 4:18-19 もう一つの、茨の中に蒔かれたもの

とは、こういう人たちのことです。みことばを聞いたのに、この世の思い煩いや、富の惑わし、そのほかいろいろな欲望が入り込んでみことばをふさぐので、実を結ぶことができません。」ここに、「世の思い煩い」とあり、世の愛が、神への愛を取り上げて行ってしまふことが書かれています。

### 2B 冷えた愛

そして、人々のキリストへの愛が、冷えて行ってしまいます。今あること、自分の生活で起こっていることのほうが、神の愛よりも魅力的に見えるのです。

### 3B 行いによる否定

そこについて、行いでは主を否定しているようになってしまうのです。「Ⅱテモ 3:2-5 そのときに人々は、自分だけを愛し、金銭を愛し、大言壮語し、高ぶり、神を冒し、両親に従わず、恩知らずで、汚れた者になります。また、情け知らずで、人と和解せず、中傷し、自制できず、粗野で、善を好まない者になり、人を裏切り、向こう見ずで、思い上がり、神よりも快樂を愛する者になり、見かけは敬虔であっても、敬虔の力を否定する者になります。こういう人たちを避けなさい。」見かけは敬虔であっても、その力を否定しているということです。神を信じているとしても、神を否んでいるようなことを行っています。神の愛ではなく、自分の愛に満たされています。

それが、ヨハネが「もしだれかが世を愛しているなら、その人のうちに御父の愛はありません」と言っている所以です。世を愛したら、御父への愛はないです。御父の愛が自分のうちにあれば、世を愛することはないのです。どちらかへの愛なのです。「ヤコブ 4:4 節操のない者たち。世を愛することは神に敵対することだと分からないのですか。世の友になりたいと思う者はだれでも、自分を神の敵としているのです。」

### 3A 悪い者の支配

ヨハネは、福音書の中で「神が世を愛された」と言っている時、世にいるすべての人を愛された、ということでもあります。けれども、ここ第一の手紙で話しているのは、悪い者が支配している国、あるいは制度を意味しています。この手紙の最後のほうで、「世全体は悪い者の支配下にあることを、私たちは知っています。(5:19)」とあります。

### 1B 神から人を引き離した蛇

悪い者、悪魔は、人を神の愛から引き離すことを初めから行って行っていました。エデンの園にいた、エバそしてアダムを、神から引き離しました。罪を犯すようにそそのかし、それでその罪によって、主の住まわれる園の中にいられなくなったのです。

### 2B 妬みと殺人

そして悪い者は、カインの心にも働いていました。神に、信仰によって正しいいけにえを、弟アベ

ルは献げました。そのことをカインは妬み、怒りました。そして、罪を犯さないように自分を治めないといけないと、主に警告されたのに、兄弟をカインは殺してしまったのです。ヨハネはこの手紙の中で、カインについてこう話しています。「3:12 カインのようになってはいけません。彼は悪い者から出た者で、自分の兄弟を殺しました。なぜ殺したのでしょうか。自分の行いが悪く、兄弟の行いが正しかったからです。」

### 3B 自分の名をあげる高ぶり

そしてカインの子孫が増え広がり、主は洪水によって、ノアの家族は箱舟で救われましたが、その他は滅びました。そしてノアの家族から人々は増えましたが、その彼らは高ぶります。バベルに塔を建てたのです。「創 11:4 さあ、われわれは自分たちのために、町と、頂が天に届く塔を建てて、名をあげよう。われわれが地の全面に散らされるといけないから。」この高ぶりは、まさにサタンが、かつて天において行ったことです。いと高き方のようになろうとして、それで天から墮ちました。

### 4A 世への愛

このように、世といっても、神によって造られた世界と、神に敵対する悪魔の支配があります。

#### 1B 神の造られた世

神の造られた世界には、美があります。恵みがあります。神の造られた栄光が輝いています。その自然には、神の栄光が輝いています。そして人々にも、神のかたちとしての栄光があります。神を信じているわけではない人たちにも、そのすばらしさがあります。

#### 2B 神に敵対する世

しかし、悪い者が支配しているために、その神の造られた栄光がゆがめられ、損なわれているのです。自然には、災害があります。人々には、神によって与えられたものが、罪によって傷を受けています。男女の結びつきは結婚によって祝福されていますが、そこから離れて結びついているので、どれだけ多くの涙と傷があることでしょうか。

神が、ご自分の独り子をお与えになるほどに、世を愛されたと言われた時に、それは世において、悪い者の支配に入っている人々を愛しておられるからです。ご自分のかたちに似せて造られた者たちです。このなく愛しておられますが、悪魔の虜になっています。それで、御子を遣わされ、彼の脳天を打ち砕き、罪を取り除くことをされたのです。そのようにして、世を愛されました。

キリスト者の中に、二つの極端があります。一つは、世を愛しているからといって、その価値観までを受け入れていることです。神が罪であると言われていることも、許容して受け入れようとします。もう一つの極端は、世の人々を敵とみなすことです。その罪の行いを見て、憎しみさえ抱いていることがあります。どちらかであってはいけません。私たち自身が、罪の中に生きていたのに、それ

でも神は愛してくださいました。罪は憎みます。けれども、罪人を愛しておられるのです。

## 5A 世にあるもの

そして、ヨハネはこう言います。「<sup>16</sup> **すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。**」世にあるものが、この三つの欲なのだと教えています。エバが惑わされて、食べてはいけない善悪の知識の木から取って食べたのは、この三つの欲に引き寄せられたからでした。「創 3:6 そこで、女が見ると、その木は食べるのに良さそうで、目に慕わしく、またその木は賢くしてくれそうで好ましかった。それで、女はその実を取って食べ、ともにいた夫にも与えたので、夫も食べた。」食べるのに良さそう、というのは肉の欲です。目に慕わしく、というのは目の欲です。そして、賢くしてくれそうだというのは、高ぶりですね。（「暮らし向きの自慢」と訳されていますが、自慢というよりも高ぶりです。）

ある注解者は、それぞれの欲をこう分類しています。肉の欲は、「所有したい欲望」、目の欲は「見たい欲望」、そして暮らし向きの自慢は「自分への欲望」です。最後の自分への欲望とは、自分の存在が高まっていることへの欲望です。こう考えたら分かり易いかもしれません。

### 1B 肉の欲

肉の欲望が、所有したい、これを持ちたいということで、貪りという形で現れるでしょう。民数記に、荒野で「肉が食べたい」と言ったので、神はうずらを与えられました。それらを火で調理せずに食べたからでしょうか、貪ったので、激しい疫病で死んでしまいました(11章)。

### 2B 目の欲

目の欲は、見たいという欲望ですが、ダビデが王宮から、裸体のバテ・シェバを見たのは、まさに目の欲です。イエス様は、「マタ 5:28 情欲をもって女を見る者だれでも、心の中すでに姦淫を犯したのです。」と言いました。そして、同じ山上の垂訓で、興味深いことを語られています。「6:22-23 からだの明かりは目です。ですから、あなたの目が健やかなら全身が明るくなりますが、目が悪ければ全身が暗くなります。」と言われました。目に入ってくるものが、体全体に影響を与えるがごとく、目から入ってくるものが悪いものなら、自分の生活が悪くなってしまいます。

### 3B 暮らし向きの自慢

そして、「暮らし向きの自慢」ですが、高ぶりです。バビロンの王ネブカドネツアルは、自分が成し遂げたこと、それを誇って、酔いしれました。「ダニ 4:30 この大バビロンは、王の家とするために、また、私の威光を輝かすために、私が私の権力によって建てたものではないか。」自分の成し遂げたことによって、自分自身を押し量る喜びに対して、神は厳しい裁きを行われます。「箴 16:18 高慢は破滅に先立ち、高ぶった霊は挫折に先立つ。」

これら三つの欲について大事なのは、「御父から出るものではなく、世から出るもの」とヨハネが強調していることです。これらの欲について、そのような状況に置かれたのは神だとか言ってみたり、誰かほかの人のせいにしてみたり、また自然に与えられた欲望なのだから、仕方がないことなのだとして、開き直ることもあるでしょう。ヤコブは、自分の欲で誘惑を受けるのであって、神のせいではないとはっきりと否定しています。「1:13-15 だれでも誘惑されているとき、神に誘惑されていると言ってはいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれかを誘惑することはありません。人が誘惑にあうのは、それぞれ自分の欲に引かれ、誘われるからです。そして、欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。」

## 6A 過ぎ去る世

しかし、世に対して私たちは勝利しています。17 節をまた、読みます。「**17 世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。**」

### 1B 一時的な楽しみ

世とその欲望は過ぎ去ります。それを知っていたので、モーセは、エジプトの富ではなく、イスラエルの民と共に苦しみを選び取りました。「ヘブル 11:14-16 そのように言っている人たちは、自分の故郷を求めていることを明らかにしています。もし彼らが思っていたのが、出て来た故郷だったなら、帰る機会はあったでしょう。しかし実際には、彼らが憧れていたのは、もっと良い故郷、すなわち天の故郷でした。ですから神は、彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。神が彼らのために都を用意されたのです。」

### 2B 後悔と嘆き

それで、世とその欲望は、失ったものには、嘆きと悲しみしか残しません。終わりの日に現れる、世の正体はバビロンです。世界の王たちと淫行を働く大淫婦として登場します。そこに、とてつもない富が集まります。しかし、主が裁かれると人々は嘆くのです。「黙 18:9-10 彼女と淫らなことを行い、ぜいたくをした地の王たちは、彼女が焼かれる煙を見ると、彼女のことで泣いて胸を打ちたたたく。彼らは遠く離れて立ち、彼女の苦しみに恐れをなして、「わざわいだ、わざわいだ、大きな都、力強い都バビロンよ。あなたのさばきは一瞬にしてなされた」と言う。」そして使徒パウロは、こう言います。「Ⅱコリ 7:10 神のみこころに添った悲しみは、後悔のない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。」

### 3B 永らえる喜び

しかし、「**神のみこころを行う者は永遠に生き続けます**」と言っています。死んでもよみがえるという復活の約束が与えられています。イエスの復活がそうであったように、決して朽ちることのない、滅びない体です。新天新地の神の都には、永遠に神に仕える人々の姿があります。「黙 22:5 彼らは世々限りなく王として治める。」世は滅んでも、共に滅びず、救われ、生き続けるのです。